本物作りを追いかけ、思う儘に

私は、北海道滝川市出身で四歳上の実兄・長岡凞山に誘われて、石の世界に足を踏み入れた。地元の高校卒業後は、札幌市の百貨店や花屋に勤務する。

冷たく、墓のイメージが強かった石については、全く興味がなかった。

小学生の頃から絵は得意。中学校を卒業するまで学校で描いた絵は、ほとんど返されず、学校に収集された。その後、もし絵が今でも保管されていたならばと思い、兄凞山を通じ当時の市の教育長さんに聞いたところ、古くなった学校が新築される際、これまでの古い物は処分され、絵も含め、残っていないとの返事。せめて一枚でも残っていてほしかったが時代のなせる技だった。

二十歳前後に、詩を書くことが好きになり約百編の詩を書いた。東京の二社の出版社から『青春の坂道』と題し、詩集を自費出版した。その後も、旺盛な詩作りで約五百編ほど書いたが、石仏・石像作りの方が忙しくなり、現在は途絶えている。

北海道にいた頃、百貨店勤務の際、周囲が売上を伸ばすことばかりに注力して、良い物を作ろうという精神がないことに違和感があった。そこで昭和五十三（一九七八）年一月二十一日、全国三大産地の石の都・岡崎市に移り住み、仏像彫刻を兄と共に学ぶこととなった。

「本物の石仏・石像作り」を志し、独立したのは昭和五十八年（一九八三）、六月一日である。生産性や効率を追いかけず、「いかに儲けるか」も捨てた。以来、今年六月で三十六年目に入るが、相変わらず像作りは「唯一無二」を実行し、仕事の成果や労力・時間は気にせず、本物作りを追いかけ、思う儘に石彫人生を歩んでいる。

日本人でないと作れない、日本の仏像を

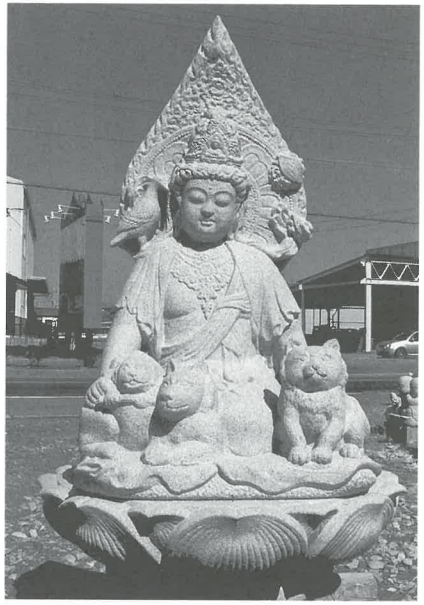
さて、「仏像彫刻」は、インドから西域、中国、朝鮮を経て日本に伝わってきた。ここで私が気づいたことは、インドにはインドの仏像、中国には中国の仏像、朝鮮には朝鮮の仏像があるように、それぞれの国の雰囲気や特色を持った仏像がある。

私は、日本人でないと作れない、日本の仏像を自らの手で作りたい。但し、平安時代後期に定朝という仏師が、すでに、日本独自の技法「寄木造」によって、京都府の平等院に阿弥陀如来坐像（国宝）を制作し、『和様』が完成したとされる。随分昔の話ではあるが、定朝以前は外国の影響を色濃く背負った渡来仏の模倣が主流だった。が、定朝の出現により「和様」が産まれ、日本の仏像は大きく変わった。鎌倉時代に慶派が出て、活躍するが、それ以後、パッタリと途絶えた。

「和様」が生まれたにもかかわらず今日でも永遠と模倣主流を続けている。

石仏も木彫仏の歩んだ道に沿っている。

私は、詩作をしたときに学んだが、人の詩を真似ると盗作になり、著作権



慈愛観世音菩薩座像（伴侶動物供養塔）
平成25年４月21日、東京都中野区・曹洞宗宗清寺墓地内に建立。（111.5×59.1×58㎝）